

氏 名 根木 英彦

学 位 博士 (英語学)

学位記番号

学位授与年月日

審査研究科 外国語学研究科

論文題目 Semantic Extension from the Bodily Part Domain into the Spatial
and the Temporal Domains: A Contrastive Study of English, Japanese and Spanish

論文審査委員 (主査) 大東文化大学教授 大月 実

(副査) 大東文化大学教授 北林 光

(副査) 大東文化大学教授 鈴木 敬了

(副査) 北海道大学教授 高橋 英光

博士論文 審査報告

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

2. 論文の要旨およびその特色

本論文は、英語、日本語、スペイン語における身体部位詞（身体の部位を指す語）を対象とし、その時間・空間領域への意味拡張の機構・動機付けを明らかにすることを目的とした研究である。従来、身体部位詞に関しては多くの研究がなされてきたが、特に時間領域への意味拡張に関して体系的に検討したものはなかった。また、本論文の特徴として、人間のみならず、動植物の身体部位をも含めた考察を行なっている点が挙げられる。

研究の依拠する理論的枠組みとしては、Lakoffなどの提唱している、意味を身体性に基づいて基礎付ける経験基盤主義の認知言語学を採用した。特に身体部位詞に関しては、Heineによる研究を重要な先行研究として踏まえている。

本論文は、身体部位詞の様々な意味の内、特に空間的意味と時間的意味に焦点を当て、その意味の派生には身体部位のいかなる機能・特徴が関与しているのか、3言語から収集した事例をつぶさに検討して考察したものである。言い換えれば、身体部位という領域から、空間領域と時間領域へのメタファーによる意味の拡張には、いかなる条件が課せられるかを一般的に追究しようとしたものである。そして、身体部位からの空間・時間への意味拡張に関して、その動機付けの候補を提案した。また、関連する諸問題についても探究し、様々な知見を得ている。

本論文の構成は次のとおりである。

Chapter 1: Introduction

1.0 Preliminary Remarks

1.1 Purpose and Scope of this Study

1.2 Material

1.3 Outline of the Dissertation

Chapter 2: Review of Previous Studies

2.0 Introduction

2.1 Ando (1986)

2.2 Kunihiro (1987)

2.3 Heine (1991)

2.4 Seto (1995)

2.5 Matsumoto (2000)

2.6 Honda (2011)

2.7 Negi (2013)

2.8 Takahashi (2014)

2.9 Conclusions

Chapter 3: Theoretical Framework and Methodology

3.0 Introduction

3.1 Bodily Based Experiences

3.2 Experientialism

3.3 Schemata

3.4 Metaphorical Mappings

3.5 Conceptual Metaphor: TIME PASSING IS MOTION

3.6 Orientational Metaphor

3.7 Metaphorical Transfer and Metaphorical Chain

- 3.7 The Zoomorphic Model
- 3.8 Spatial Grams
- 3.9 Conclusions

Chapter 4: Analysis of Semantic Extension of the External Body Part Terms in English

- 4.0 Introduction
- 4.1 *head*, 4.2 *hair*, 4.3 *face*, 4.4 *eye*, 4.5 *nose*, 4.6 *mouth*, 4.7 *ear*, 4.8 *teeth*, 4.9 *tongue*, 4.10 *lip*, 4.11 *cheek*, 4.12 *jaw*, 4.13 *chin*, 4.14 *temple*, 4.15 *neck*, 4.16 *chest*, 4.17 *breast*, 4.18 *shoulder*, 4.19 *arm*, 4.20 *elbow*, 4.21 *hand*, 4.22 *finger*, 4.23 *nail*, 4.24 *palm*, 4.25 *wrist*, 4.26 *knuckle*, 4.27 *fist*, 4.28 *abdomen / belly*, 4.29 *navel*, 4.30 *back*, 4.31 *waist*, 4.32 *hip / buttocks*, 4.33 *leg / foot*, 4.34 *thigh*, 4.35 *calf*, 4.36 *knee*, 4.37 *shin*, 4.38 *ankle*, 4.39 *toe*, 4.40 *heel*, 4.41 *sole*, 4.42 *arch*, 4.44 *skin*,
- 4.45 The Number of Idioms Involving External Body-Part Terms
- 4.46 Conclusions

Chapter 5: Analysis of Semantic Extension of the External Body Part Terms in Japanese

- 5.0 Introduction
- 5.1 *atama*, 5.2 *kami*, 5.3 *kao*, 5.4 *me*, 5.5 *hana*, 5.6 *kuchi*, 5.7 *mimi*, 5.8 *ha*, 5.9 *shita*, 5.10 *kuchibiru*, 5.11 *hoho*, 5.12 *ago*, 5.13 *komekami*, 5.14 *kubi*, 5.15 *mune*, 5.16 *chibusa*, 5.17 *kata*, 5.18 *ude*, 5.19 *hiji*, 5.20 *te*, 5.21 *yubi*, 5.22 *tsume*, 5.23 *kobushi*, 5.24 *tenohira*, 5.25 *tekubi*, 5.26 *kurubushi*, 5.27 *hara*, 5.28 *heso*, 5.29 *se*, 5.30 *koshi*, 5.31 *shiri*, 5.32 *ashi*, 5.33 *mata*, 5.34 *momo*, 5.35 *fukurahagi*, 5.36 *hiza*, 5.37 *sune*, 5.38 *tsumasaki*, 5.39 *kakato*, 5.40 *ashinoura*, 5.41 *tsuchifumazu*, 5.42 *hada*
- 5.43 Conclusions

Chapter 6: Analysis of Semantic Extension of the External Body Part Terms in Spanish

- 6.0 Introduction
- 6.1 *cabeza*, 6.2 *cabello / pelo*, 6.3 *cara*, 6.4 *ojo*, 6.5 *nariz*, 6.6 *boca*, 6.7 *oreja*, 6.8 *labio*, 6.9 *mejilla / cachete*, 6.10 *mandíbula*, 6.11 *barbilla*, 6.12 *sien*, 6.13 *diente*, 6.14 *lengua*, 6.15 *cuello*, 6.16 *pecho*, 6.17 *hombro*, 6.18 *brazo*, 6.19 *codo*, 6.20 *mano*, 6.21 *dedo*, 6.22 *uña*, 6.23 *palma*, 6.24 *puño*, 6.25 *vientre / barriga*, 6.26 *ombbligo*, 6.27 *espalda*, 6.28 *cintura*, 6.29 *nalga*, 6.30 *rasero*, 6.31 *pierna / pie*, 6.32 *muslo*, 6.33 *pantorrilla*, 6.34 *rodilla*, 6.35 *espinilla*, 6.36 *tobillo*, 6.37 *talón*, 6.38 *planta*, 6.39 *puente*, 6.40 *piel*,
- 6.41 Conclusions

Chapter 7: Analysis of Semantic Extensions of the Internal Body Part Terms in English, Japanese and Spanish

- 7.0 Introduction
- 7.1 Idioms Involving Emotions
- 7.2 Idioms Involving Spatial Concepts
- 7.3 Idioms Involving Body Parts
- 7.5 The Number of Idioms
- 7.6 Conclusions

Chapter 8: Analysis of Semantic Extensions of Non-Human Body Part Terms of Animals and Plants in English, Japanese and Spanish

- 8.0 Introduction
- 8.2 Previous Studies

8.3 Methodology

8.4 Analysis of Data: Animals' Body Part Terms

8.5 Analysis of Data: Plants' Body Part Terms

8.6 Conclusions

Chapter 9: Conclusions, Contributions, Problems and Prospects

9.0 Introduction

9.1 Conclusions and Contributions

9.2 Problems and Prospects for Further Research

9.3 Concluding Remarks

Sources of Data & Abbreviations

References

本論文は、英語、日本語、スペイン語における身体部位詞とそれを含む表現を対象に、身体部位から空間と時間への意味拡張に関して詳細な検討を加えたものである。意味拡張の有無と、その範囲の確定に関しては、*Oxford English Dictionary* (第2版)、『日本国語大辞典』(第2版)、*Diccionario del Español* を始めとする各国語の辞典類から収集した用例に加えて、先行研究および母語話者から直接得た事例を活用した。

代表的な先行研究である Heine (1991) は、身体部位詞の意味拡張に関して、以下のような方向性を提案している。

(a) 人間 > (b) 物体 > (c) 活動 > (d) 空間 > (e) 時間 > (f) 性質 (記号は引用者に依る)

これは、全体としては、より具体的な意味からより抽象的な意味への配列であり、最初の「人間」は、特にその「身体」が意味拡張に深く関わっている。英語の *back* を例に挙げると、そこから拡張した意味には以下のようなものがある。

back : (a) “背中” > (b) “後部、背もたれ、(書物の) 背” > (c) “支援する; 逆行する”

> (d) “奥(の)、裏側(の)、後方(の)” > (e) “過去の” > (f) “未開の、遅れた”

(複数の品詞に跨る場合もあるが、意味的にはそれぞれ共通の範疇に属するものとして纏めることができる。) 根木氏は、英語と日本語に関して、Heine の挙げている上記の方向性は歴史的な意味の出現順序と、完全にではないが、身体 > 空間 > 時間の順序に関しては、ほぼ一致することを確認している。

なお、一般的にどの身体部位詞にも上記すべての種類の意味拡張が観察される訳ではない。ほとんどの場合、一部の意味拡張のみが言語表現として実現している。例えば、日本語の「あし」には、以下のような意味が見られるが、上記すべての拡張があるわけではない。

(a) (人間の身体部位としての) 「あし」(足・脚) > (b) (机・椅子などの) 「あし」(脚)

> (e) 「(鮮魚について) 足(腐敗する時間) が速い」

本論文では、(広義の) 「身体部位」を大きく3つに分類している。人体の外部部位(手、足など)、人体の内部部位(心臓、肺など)、(人体にはない) 動植物に特有の部位(羽、尾、葉など)である。収集したデータでは、人体の外部部位の方が内部部位よりも、空間・時間領域へ拡張しているケースが圧倒的に多く観察された。これは、外部部位がその典型的特性として環境中の人や物に何らかの形で働きかける機能を有しており、またその機能もより認知されやすく、言語的にも概念化がより容易であるためと考えられる。(一方、内部部位には、空間・時間よりも、感情・気質等に関わる事例が多く観察された)。

さらに、根木氏は、身体部位詞の空間・時間領域への意味拡張の動機として以下の7つのタイプを提案している。

(a) 移動可能性、(b) 利用可能性、(c) 方向性、(d) 位置性、(e) 形状性、(f) 創出[発生]性、(g) 現状性

そして、部位によって、生ずる意味拡張の種類に差があることを発見したのである。

典型的には、まず、外部部位には、空間移動に関わる<移動可能性>(foot、「あし」など)、事物に接近して働きかける<利用可能性>(hand、「て」など)、対象物への<方向性>(「め」[目]など)といった、意味拡張の動機づけとなる特性を有している部位が多く観察されるが、これらの特性は内部部位には見出されない。

また、同じく<位置性>を示す部位であっても、外部部位 (back、「あたま」、「お」[尾]など) の場合は、時間領域にまで拡張している。例：「あたま」(頭) > 「頭から㉔ (位置的な端から)」 > 「頭から㉕ (時間的な最初から)」

しかし、内部部位 (heart、「心臓」、corazón など) の場合は、空間領域にしか拡張していない。

例：the heart of a city、「都市の心臓部」、corazón de una ciudad

同様に、同じく<形状性>の動機づけを有する場合でも、外的部位の「髪」(hair、pelo) には時間的意味 (by a hair、「間一髪」、por un pelo) がある。(いずれも毛髪の形状(極細)から、まずは(髪の毛ひと筋の)「僅かな隙間」という空間的な意味、そして「一瞬」という時間的な意味を産み出したと考えられる。) これに対して、内部部位の「動脈」には空間的意味(「都市の動脈」)だけである。このように、時間への意味拡張がほぼ皆無であることは、内部部位の特徴である。(唯一確認できた事例として、英語の from the womb to the tomb (生まれた時から死ぬ時まで) がある。ここでは、生命誕生の場としての womb (子宮) の<創出[発生]性>から時間への拡張が生じている。) これは、外部部位のような空間上の移動がないところからは、時間上の移動観念も生じにくいと考えられる。

そして、植物の場合には、人間や動物にはない、<現状性>という動機づけが観察される(「最盛期」を表す flower、「花」など)。

最後に、身体部位詞そのものではないが、空間的・時間的意味に関係するテーマとして、根木氏は英語・日本語における史的意味発達の研究も行なっている。その結果、英語 (after, back, before) においては、必ず空間的意味が時間的意味よりも歴史的に早く出現しているのに対して、日本語 (あと、さき、まえ) においては、これらの語の出現するそれぞれ最も古い文献においても、既に空間と時間の両方の意味が出現しているという事実を明らかにした。時間的意味の史的発達は、豊饒な成果の期待できる領野であり、その核となるのが身体部位詞の意味発達であると言えよう。今後の更なる研究の進展が大いに期待される場所である。

3. 論文の審査内容および評価

本論文の最大の意義は、従来十分には探究されていなかった身体部位詞の空間・時間領域への意味拡張に関して、英語、日本語、スペイン語の3言語における身体部位詞とそれを組み込んだ表現の包括的かつ体系的な全体像を提示したことである。氏が作成した、3言語の表現とその意味を比較対照できる一覧表も、今後この分野の研究を進める研究者に貴重なデータを提供するものであると言えよう。意味拡張の動機づけのタイプの提言は、大変意欲的な試みであり、部位によって生ずる意味拡張の種類に差があることを見出したことは、それ自体が意義あるものであるばかりでなく、今後の研究を大いに刺激するものである。また、植物の部位の意味拡張など、従来手付かずであった領域の研究に先鞭をつけたことにも、研究領野の新規開拓という意義が認められる。

今後の課題としては、動機づけが個別に列挙されているが、それらの間の関係性についての追究までは成されていないことが挙げられよう。一方、展望としては、まさにこれらの動機づけの更なる一般化を図るとともに、身体部位以外の領域における意味拡張との相同性・異同性を明らかにすることができれば、理論的に大きな飛躍を成すことが可能となるであろう。

□審査委員・副査の講評

■北林 光

根木氏の見出した一般化は、正確さと明快さをもって提示され、説得力ある議論が展開されている。更に、氏の文章技能は、研究者・著者としてまだ場数を踏んでいない院生から通常予想されるようなレベルを遙かに超えた精密さと簡潔さを兼ね備えた文体を示している。氏の研究の将来の発展は、当人がこれまで携わってきた射程を超えるものとなるであろう。特に英語に関して、歴史言語学の分野における研究ツールとして作られたコーパスの通時的データのさらなる利用により、氏の研究が将来の研究者によって言語使用におけるパラダイム・シフトの基礎を成す時間枠を見出すべく拡充されることが想像できる。そのことが今度は、個人や事象が文化に与える衝撃の年代と範囲を正確に位置付けることを可能にすることによって、人類の歴史の進行をよりよく説明することに寄与するであろう。氏が、この素晴らしく完成された博士論文について、当該分野にお

けるさらなる研究によって探究を続けることが望まれると同時に、今後何年か後に、その出版によって大東文化大学に榮譽をもたらすことが期待される。私は、根木氏とその博士論文を保留なしに推挙するものである。氏は、英語学の博士号を授与されるに十分、資格がある。

■鈴木敬了

根木氏の研究は身体部位の意味拡張にどのようなメカニズムが働いているかを英語、日本語、スペイン語で調査したものであり、特に日本語と英語の意味拡張の差異を浮き彫りにしている。氏のテーマは認知言語学の重要な研究テーマであり、今後、3言語のコーパスを使用することにより、大いなる発展が期待される。さらに氏の研究方法は認知言語学分野で著名な Heine や Lakoff の理論を用い堅実な姿勢を見せている一方、それらの理論の検証も怠らず、Heine の論文では挙げられていない例を日本語に発見するなどすぐれた研究眼を随所に発揮している。本論文は認知言語学分野に大いなる貢献を成す質の高いものであり、また歴史言語学的視点から歴史認知言語学の可能性や他言語のメタファー研究などの拡張性に富み、十二分に博士論文として認められるものである。

■高橋英光

本博士論文は、英語、日本語、スペイン語の三言語の身体部位表現の研究であり、とくに身体部位表現（語彙）が空間領域から時間領域へと転用されるメカニズムの解明を主目的としている。3言語の外部身体部位のみならず内部身体部位、さらには動植物の部位にまで調査を広げるなど非常に意欲的な研究である。

本論文は上記の目的を十分に果たしている。特筆すべきは、3言語の46種類にも及ぶ身体部位表現を丁寧に収集・分析した表と、空間から時間領域への比喩拡張の7つの動機（transportability, accessibility, directionality, positionality, form, emergence, status quo）を同定した点である。前者は言語資料として価値が非常に高く、後者は認知言語学のメタファー理論として重要な成果である。

論文はうまく構成されていて、個々のデータ分析は注意深く行われ、英文も明晰である。認知言語学のメタファー研究者のみならず、英語学、日本語学、スペイン語学、対照言語学、慣用表現、身体部位表現の研究、さらには英語教育にも有益である。本研究で得られたデータと知見は様々に応用可能であり今後の研究の発展が大いに期待できる。

今後の課題としては、ある表現をメタファーとして認定する基準、時間領域への拡張の「多さ・少なさ」の判定方法のさらなる追究が挙げられよう。また、日本語の身体部位時間表現と日本語の一般的特徴とされる“become language / situation-focus language”との関連の指摘は非常に興味深い、さらなる考察の余地を残している。しかし、これらの点は今後の研究につながる発展的課題として評価できるものである。本論文は十分に博士論文の資格を有すると判断できる。

4. 結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（英語学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

以 上